

覚 書

宗 道 達

A Part of the Literary Movement of

“*Bungakukai*”

Tōru SHINJI

この覚書は、完成の上は「『文学界』発行緒言と『硯友社』社則」とでも題せらるべきものである。といふのは、こゝ数年弄んでゐる『明治26年創刊「文学界」の文学運動』中の或る一章となる筈のものゝ素材であるから。

明治26年1月創刊「文学界」の「発行緒言」は、その創刊号に載せられてある。これは、「文学界」同人中の最年長者であり、また「文学界」の経営、編輯の責任者であつた星野天知（慎之輔）が執筆したものである。少し長文であるが必要であるから次にこれを記してみる。

方今文学雑誌の類名あるもの少からず而も文界の域漠々として際みなく徒に諸氏のみを勞せしむべからず吾曹の任務尙尽さざるべからざるものあるを信ず、本社曩に発兌の雑誌を分ちて白表赤表の二巻とし一は益政治社会時文と關係を厚ふし、一は愈實際の域に進みて家庭に友たらんことを期せり。而して今や文界の友に向ては此「文学界」なる冊子を發し社員社友の斯道に志ある者相集ひて互に其得たる所思ふ所を述べ我好読者と共に幽默得て言ふべからざる文界に逍遙遊し併せて志篤く便り少き人の為めに好修養場となり又人々が一場に会して道に語り想を練り文を研ぐのたよりとなり以て他日の大成を待たんとするものなり。

されば微々たる小冊子素より此重任に当るに足らず其體裁の不完全なる其単調にして趣味に乏しき等短所少からざるべく幾多読者の為めに寸毫の補あるを知らずと雖も唯名を求めず譽を受けず誠実に勉め励みて斯道の為めに幾分を尽し隠れたる秀才を同好の間に紹介し又初学の人々の為めに懇ろに備へんことを期すべしされば今の文界の表面に出で、別に一派の旗幟を立てんことなど此冊子の志にあ

らず。

女性の雑誌として女性全體の事を記するもの世既に多々有益なるものあり而して今や女流文学の氣運に向ふて其友たらざるを得ざるものあり、特に女文欄なる欄を設け書ぶ女性の機關に備へんとす、勿論弊社の「女学生」の任は此冊子の負ふ所にして尙又同盟諸子の求めに応じて尽し且つ広く女性の投寄を得んことを望む。

活きたる文学は活きたるものに味ふべし、古の名家詩人が趣味消息を敲かんは又文学の趣味消息を知るのたよりなり、成るにまかせて之を掲ぐと雖も概ね作者が心血をからせし跡ならざるなし、幸に熟味して輕浮なる批評と同視せられざるを願ふ。

読書は第一の修養なり、されど濫りに読まんには学は徒に荒み想は空に失すべし、此冊子新刊紹介の欄に於ては新作雜書の内好著と思はるゝをすゝめ、群書一斑なる欄に於ては古文庫をさぐりて古人の名著を紹介し併せて詩歌小説歴史哲学心理審美その他広く文学の範圍に於て初學者の便に供ふべし。

此他諸名家の詩歌文集の釈義、海外文学の評釈等を掲げ文学ぶ者の概念を養ひ、内外の純潔、高雅なる好小説及び諸家好論説を統々掲ぐべし。

又毎号附録を附し古人が想高く趣深き詩歌文書等未だ多く世に出でざるものを拾録し後集めて一冊子となすべからしむ。

又諸評釈、群書一斑等も後合綴すれば一冊

子と成すべし、而して本誌の爲めに特に力を尽さんとせらるゝ諸君、大略左の如し。

- 若松、花圃、一葉の諸名媛は袂を連ねて清婉優雅なる作に筆を染め
- 大和田建樹氏、井上通泰氏等は釈義歌話等に力を尽され
- 紫苑山人、古藤庵主等は時々詩歌ドラマ等を吟じ
- 其他透谷子、天知子、棲月子、禿木子、女学子等又各筆硯を新にし時事文学評論批評、文学論説、史談、翻訳等に勉めんとす。

一方、「硯友社則」は、明治21年5月25日發兌、初めて公売された「我楽多文庫」第一号（明治18年5月創刊以後の手写回覧本及び19年11月以後の活字非売本の号数を通算すれば、第17号目に相当する。）に載つてゐる。これは尾崎紅葉が自ら草したものとしてされてゐる。次にこれを引用する。「硯友社則」と題し、9条目からなるものである。

一本社は広く本朝文学の發達を計るの存意に有之候得ば恋の心を種として艶なる言の葉とぞなれる都々一見る物聞くものにつけて言出せる狂句の下品を嫌はず天地をゆさぶり鬼神を涙ぐますなどの不風雅は不致ともせめては猛き無骨もののかどまるめ男女の中をも和らく事を主意と仕候

但し按摩同席にて読むやうな投書は一樹の烟一河の水にいたす可候

二右の主意に御左袒被下一臂の力を借し給はむとの篤志の方々は男女老弱貴賤を論ぜず社員たる事御勝手次第に御座候

三社員は社費として毎月金十銭を其月の五日迄に御納可被下候

四入社したまはむとならば社費に添へて住所、姓名、雅号印鑑を御寄送被下度候 用紙は奉書にて巾三寸長五寸

五社員は文庫發兌毎に只五五分にて一部進呈可仕其他いろいろ徳分なる事有之候得共詳にせば天機を洩らすのおそれ有之候まゝ委細は御入会の上しる人ぞ知るサネ

六本社は小説の起草、劇場の正本、小説の反訳（潤筆は一字につき千金づゝ申受候）広告の案文歌句戯文の添削批評等の御依頼に応じ可申候

但し建白書の草案記稿其外政事向の文書は命に替へても御断申上候

七世の著作家にして其著書を本社に寄せられなば本社は街談巷説に其批評を掲げ尙森羅萬象に於て相当の広告可致候

八全国の新聞雑誌等にて本誌を批評し其一葉または一部を本社へ寄送せらるるの勞を賜はば本社は引続き次号を進呈可致候詩に曰く蝦釣鯛これこの所謂には無御座候

九こまこま敷事につき御疑問の廉は、本社へ願ひたく今回は先づしやそくの間に合せと洒落て条条如件

終りに、明治21年5月 硯友社 と記してある。ところが、これより前即ち「我楽多文庫」第10号（活字非売本としては第2冊目）の「千紫萬紅」欄には、同じく紅葉の筆になるところの「硯友社則」と題する次のやうな条々を載せてゐる。

一戯則は規則の洒落にして国音驥足に通ず驥足は笑和抄（これで和名抄とよむのサ）に馬の具足とありこれは初の内こそ馬の足でも本社の舞台で腕を磨けばつまり千両といふ価値がでるとはハテ深い意味ネ

二本社は男女老少粹不粹水にすむ船頭花をうる老爺生としいけるものゝ会員たることをゆるすなり但し自惚生酔のお客様は御入会堅く御断申上候

三本社は毎月一回我楽多文庫を刊行すこれは売買禁制の品なれば銭かねづくではとんと自由になりませぬむかしの名妓によくある奴也

四会員は毎月金拾銭を収むべしといふと他人がましいが矢張り例の京伝流サ

五文庫は三門に種類をわけ第一門を小説とし心織筆耕と名け第二門を戯文狂歌俳句新體詩などゝし千紫萬紅と名け第三門は五三桐

の飛花落葉(デエ酒落るノ)と名け狂句
端唄都々一落語謎とすれどもこれもとかく
おきにいるの門なり

六おやしきでは不義をきつい御法度とす本社
にては焼直しが大の禁物なりそれもコンガ
リ狐色なら編輯方が方寸の中にある

七第六の戯則をやぶり至て腹の黒装束が折々
忍びこむときは編輯方がすかさず曲者まで
と引戻しても当身をくらつて取逃しウスト
ロの鳴物で紙上へあらわるゝことなきにあ
らず方々御酒断めさるな

八第十一集より新に「悪口雑言」といふ別欄
をしつらへ小説初め狂文歌句なり都々一な
り投書中に文庫の紙面へ泥をぬる鍍細工の
断章主義又は黒焦の焼直しを認めたる方は
早速に批評を本社へおくりたまへ次集(十
一集)の悪口欄へそのまま掲載して二度と
蟲気の起らぬやうお灸を据るつもりなり弁
駁が参ればそれも記載して文壇に両雄才を
闘はすといふ此新案や其争や君子どうで
ス

右の条々肝に銘し掌へかき付甜めて置くべ
き者也

一は発行緒言であり、他は社則、戯則である
から、或ひは比較対照の材とは成り得ぬかも知
れない。とすれば、むしろ「我楽多文庫」につ
いても、明治18年5月2日の手写本第1号の紅
葉の一文を持つて来なければならぬいだらう
か。「我楽多文庫披露」と題するものである。

檄して曰くはチト大業。文して参るはヤ、
艶めく。則ち書をもて才子諸彦に告まつる。
夫れ。人各楽あり。隣の壁から燈をぬすみて
書読むも楽なり。銅臭きを喜ぶ守銭奴。一筆
の冷飯に事足とする清貧家も。亦楽しむ所な
からずやは。傾城の涙に家蔵の雨漏りをかへ
りみず。あるは二合半の寝酒に布袍を打殺し
て。飛だ罪障つくるも亦楽の一部ぞかし。さ
れど隣の壁ぬかば。尻を喰ふのおそれなきに
あらず。銅臭きはちゝむさし。さりとて冷飯
は腹剛ばりて病や起らん。家を持ねば傾城が
涙の雨の漏り所。無一銭では寝酒も飲めず。

ア、なんとしやふ。どうしやふと。こつて思
案のいばらこそ。筆の林に閑居して。不善は
なさぬ君子等の。快樂と一派。和歌詩歌の上
品より。小説狂文狂詩歌句。四面に堅き角を
去り。端歌都々の心意気。一切無差別。か
きあつめ。我楽多文庫の名にし負ふ。諸彦も
我も楽の。多き冊子を月々に。編して而して
読書余聞の憂晴し。噫是天下無上の快樂。俱
にせんとの有志の君達。珠玉を空しく祕め給
はず。値をまたず沽んかな〜とのたまへ
ば。我もいはなん。買はんかな〜。

文末に「明治十八歳彌生の末つかた 柳翠花
紅樓のあるじ 半可通人」と記し、自楽の印が
捺してある。

さて、これをも亦社則、戯則と共に含めて、
「文学界」と「硯友社」との、夫々の目的、組
織、拘負等について比較討究してみることも、
あながち誤りではないと思はれる。何故なら
ば、両者ともに、その対社会、対文学、対内部
の態度、精神を闡明してあるものであるからで
ある。

一言にしていふならば、「文学界」は純真真
摯であり、「硯友社」は真面目とふざけと半ば
してあると言ひ得るであらう。誌名の由来から
して「我楽多」の意味は、紅葉のいふやうにふ
ざけたものである。ふざけてあるといふこと
は、必ずしもこれら社則、戯則、披露文の文章
文体が伝統的な戯作草双紙風であるといふ表面
的なもののみではあるまい。その作家精神の問
題であらう。或ひは言ふかも知れない。これは
世情に通じ、世故に長けた文人の集りであり、
他は世馴れぬ乳臭の文学青年の団に過ぎない
のであると。しかしながら、作家精神、文学態
度に於て、世故に長けてある、ゐないはどれ程
の何を意味するのであるか。時代の現実を洞視
し、更に未来にわたつて翹望するところに意義
と価値があるのではなからうか。又、「文学界」
と「我楽多文庫」とには時代的差異、同人の年
齡的相違をいふものもあるかも知れない。「我
楽多文庫」の明治18年5月から22年10月迄と、
「文学界」の明治26年1月から31年1月迄とを

見れば、多少の時代的相違があるかも知れない。その僅か数年の相違が一方をして旧態依然たる精神たらしめ、他方をして新時代的たらしめたとも考へられようが、しかながら夫々の同人を年齢的に見るならば、その成長した時代にさほどの相違があらうとも考へられないのである。例へば、「文学界」創刊当時、戸川残花38才、星野天知32才、北村透谷26才、平田禿木、島崎藤村、戸川秋骨等は21才乃至23才である。この時に於ける紅葉等の年齢は、紅葉27才、山田美妙26才、その他丸岡九華、石橋思案、川上眉山、江見水蔭等を見れば25、6才前後である。つまり、「硯友社」は通を気取り、粹に洒落のめし、披露文にも見られるやうに快樂のため以外には何等實際目的を持つてゐないといつてもよいであらう。それに対する「文学界」は、青春を懊惱し、人生を苦悶し、真善美を追求憧憬するやるせない情熱の一団である。こゝに両者の確然たる根本的な相違点があるのではなからうか。

手写回覧本第1号の「我楽多文庫披露」は活字非売本第10号の「硯友社戯則」となり、更にまた活字公売本第1号の「硯友社社則」と進展したと見るべきであらう。言はんとする内容にさしたる差異はないが、その過程に於て、化政度戯作者流の言葉の遊戯を意識的に模倣した戯文的要素は漸次うすらいで行つてはゐる。しかしそれは払拭されてはゐない。「戯則」等に於ける表現技巧、奇抜な着想等を取上げて、紅葉の文学的天稟を感嘆する向きがあつても、それは肝心なことを忘れてゐるのではないだらうか。即ち、文化文政期の戯文的雰囲気がどんなに硯友社の中に色濃く浸み込んでゐたかといふこと、それが新しい世代に何を寄与したかといふことである。

「硯友社社則」第1条に示すところのものは、文学に対する目的、態度を言つてゐると見るべきであらう。

「広く本朝文学の発達を計るの存意に有之候……………」

とは、遠大な抱負、目標であり、「恋の心を種

として……云々」以下古今序をもぢつた文句は、文学の美妙優雅な機能を肯定すると共に、彼等「硯友社」一派の主情主義的傾向を示すものではあるが、「文学界」が、

「方今文学雑誌の類名あるもの少からず而も文学の域漠々として際みなく徒に諸氏のみを勞せしむべからず吾曹の任務尙尽さざるべからざるものあるを信ず。」

と言つてゐるのも、敢て「硯友社」の「広く本朝文学の発達を計る」といふ抱負に劣るものではない。むしろ、真摯にして而も軒昂たる気構へを感じさせるものである。

続いて「文学界」は、

「社員社友の斯道に志ある者相集ひて互に其得たる所思ふ所を述べ我好読者と共に幽默得て言ふべからざる文界に逍遙遊し併せて志篤く便り少き人の為めに好修養場となり又人々が一場に会して道に語り想を練り文を研ぐのたよりとなり以て他日の大成を待たんとするものなり。」

と言ひ、

「隠れたる秀才を同好の間に紹介し又初学の人々の為めに懇ろに備へんことを期すべし。」と醇々と述べて、その抱負目的の内容を先づ明かにしてゐる。又、その内実に於ては軒昂たる意気を蔵しながらも、

「微々たる小冊子素より此重任に当るに足らず」

と言ひ、

「今の文界の表面に出で、別に一派の旗幟を立てんことなど此冊子の志にあらず。」

と謙譲の辞をも述べてゐる。

次に「文学界」の特色として見られるものは、「女流文学の気運に向ふて其友た」ることであり、女文欄を設けて広く女性の投寄を望んだことである。これまた實際は、女性よりはむしろ当代青年の迎へるところではあつたが、

「我楽多文庫」も勿論、

「男女老弱貴賤を論ぜず社員たる事御勝手次第に御座候」

と組織に入る者の資格を説いて、門戸開放の自由

性を強調し、女性をも拒むものではなかつたがその意識に於て、「文学界」のそれとは根柢に於て全く異なるのである。

「我楽多文庫」は都々一狂句に至るまで拘泥しないが、

「按摩同席にて読むやうな投書は一樹の烟一河の水にいたす可候」

と作品の質について一応は一釘を打込んでゐる。之に対して「文学界」は、

一「文学の趣味消息を知るのたより」として「古の名家詩人が趣味消息を」探ること、二新刊の好著をすゝめ、「古人の名著を紹介し」、以て「詩歌小説歴史哲学心理審美その他広く文学の範圍に於て初学者の便に供へ」ること、

三「名家の詩歌文集の釈義、海外文学の評釈等を掲げ」ること、

四「内外の純潔、高雅なる好小説及び諸家好論説を続々掲」げること、

これらを約束し、そしてそれを実行したのであつた。

われわれはこの点に両者の非常な相違を見出すのである。「文学界」には、都々一狂歌の類にまで言及した言葉は一言も見出し得ないが、「我楽多文庫」にはまた海外文学の評釈、哲学心理審美にまで及んだ言葉を見出すことはできないのである。こゝにこそ両者の根本的差異があると考へてよからう。一は北村透谷が擬元祿文学なりと痛論した戯作戯文式封建的趣向意識であるに於て、他は高雅純潔な古代への探究と共に、新しい世代の新しい文学、新しい思潮の先駆者たることを高く標榜してゐるのである。

「我楽多文庫」は新入社員に対しては、横3寸縦5寸の奉書に、住所、本名、雅号、印鑑をしたゝめ、社費を添へて社幹のもとに提出すべきことを規定してゐる。これは入社形式と社員たるの義務を示したものであり、結社の権威と尊厳と自覚とを示してゐるが、一面に於て商根の並々ならぬものを示すものに

一「社員は社費として毎月金十銭を其月の五

日迄に」納入のこと、

二「社員は文庫発兌毎に只匆五分にて一部進呈」の外「いろいろ徳分なる事」のあること、

三小説、戯曲、広告文、歌句、戯文等の添削批評を応分の報酬にてなすこと、

四著作家にしてその著書を寄贈すれば批評と広告をすること、

五全国の新聞雑誌にて本誌を批評し、一部を寄送するものには、引続き本誌を進呈すること、

と社員の権利と利益とを列挙してゐる。これらは勿論社則であるから細々と規呈してゐるのは当然でもあらう、しかし、「文学界」に於ては全く見られない事項である。尤も、「文学界」の経営は、日本橋の老舗星野天知が全責任を持つてゐたのであるから、金銭上のことまで細々と記す要はなかつたのかも知れない。しかし、既に述べたやうに、他の項目についてみれば、そこにも「文学界」と「我楽多文庫」との、雑誌刊行に対する作家の精神なり態度なりに大きい相異点のあることを認めないわけには行かないのである。

以上に述べて来た両者の精神なり態度なりに於ける根本的な差異といふものは何に基因するのであらうか。それは、西欧に対して眼を開くか否か、封建伝統に対して批判があるか否かの点に岐路があると思はれる。

「文学界」はどうであるか。彼等の芸術観、人生観に根本的といへる多大な影響を与へたものは19世紀初頭の英国浪漫主義、独逸浪漫主義であつた。ゲーテ (Goethe) であり、バイロン (Byron)、シェリー (Shelley) であり、シェークスピア (Shakespeare) である。或はウワーズワース (Wordsworth)、キーツ (Keats) であり、ダンテ・ロッセッティ (D.G. Rossetti) 等である。これらの人生観、芸術観上の因襲的規範打破の思想は、或ひは反抗的となり、形而上的となり、虚無的となり、或ひはまた美の憧憬、純愛の讚美となつて、「文学界」の人々に偉大な影響を与へたのである。透谷に於ける、

禿木に於ける、藤村に於ける、破壊的、虚無的、空靈的なもの、或ひは典雅にして甘美な抒情性、深沈たる憂鬱性をみれば、このことは大半察知せられるであらうし、またこれらが、「文学界」特有の情緒雰囲気でもあつた。この思考がわが文学に向けられる場合、江戸文学に於ける封建的な、勸懲道德、女性観、恋愛観への批判と破壊となつてあらはれ、或ひは西行、芭蕉の如き人生の苦惱者への思慕としてあらはれて来るのである。尙、「文学界」の人々に於けるキリスト教の教養の影響を見逃すことはできない。

一方、「硯友社」はどうであらうか。紅葉、思案、美妙等は東京大学予備門に学び、九華も亦高等商業学校に学んでゐる。従つて、西歐文学に対して全く盲目であつたとは考へられない。事実、美妙の「竖琴草紙」(手写回覧本第1、第2号)の如き西歐作品に材を得たと思はれるものもあり、或ひは翻案的なものが紅葉等にもないわけではないといはれる。しかしながら、彼等の眼を注いだものは必ずしも時代の新風ではなかつた。

美妙の如きは、新體詩に於てもその草創の時期に幾多の試みをなし、小説に関しても、わが邦の小説の多くは前人の糟粕を虚飾巧辞を以て彩り、或ひは道德を以て規範し、或ひは野卑、

軽薄、猥褻であると、相当に新しい意識を持ちながら、一方に於て、縁語掛詞に彩られた瑰麗な文調を誇つた馬琴を以て自らの典型と仰いでゐる。

根本は、「硯友社」もまた芸術至上主義的傾向とはいふものの、その芸術観、人生観に於けるところのものは、化政度の風趣を憧憬し、粹と通の世界に耽美しようとするものに外ならなかつた。

「文学界」「硯友社」共に、実用主義や蕪雑な政治小説に対する反抗でもあるが、一は西歐的欧化的であるに対し、他はそれにも更に反動する伝統趣味、国粹趣味である。されば「硯友社」には、封建元祿化政度の文学への批判はおろか、無条件謳歌となつてゐるのである。馬琴が仰がれ、三馬、一九等はふざけまはり、西鶴は堂々縦横に潤歩した。

この小文に於ては、一方を非とし他方を是とするものではない。二者共に、明治文学史上に於ける偉大な文学運動の夫々の中心であり、起点であつた。後來に与へた影響その他功罪またこゝには論外である。こゝには、文学態度、作家精神の問題に関して、二者を簡単に比較し、素描してみたのに過ぎないのである。

1952.9.20

註を附すべき事項が幾多あるが一切略した。